様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６８７０２４８

研究課題名（和文）越境文学における作家のアイデンティティ形成 ― ミラン・クンデラの試みを中心に

研究課題名（英文）The Formation of writer identity in transnational literature - on the attempts of Milan Kundera

研究代表者
ローベル　柊子（田中柊子）（RAUBER, Shuko）

静岡大学・情報学部・准教授

研究者番号：２０６３５５０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では外国語で執筆する越境作家が出身地の言語的文化的要素をいかに別の言語で表現し、外国においていかに作家としてのアイデンティティを形成したかを検討した。特にミラン・クンデラのケースに注目し、これをもとに他の作家との比較検討を行った。外国語執筆の契機は亡命、移民、旧植民地出身、個人的な選択など多様だが、多くの越境作家において地域に根差した表現が顕著に見られ、越境の経験が創作の源となっている。クンデラにおいては世界的に読まれることへの意識が強く、ローカルな要素の表現に抑制が見られた。国内外での学会発表、ワークショップ、著作を通して成果を広く公開した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I have been interested in transnational writers who wrote in foreign languages. I examined how they treated cultural and linguistic elements of their native environment in another language and formed their identity as writers in foreign countries. I focused my analyses on Milan Kundera' s case and then compared it to those of other multilingual writers. The reason for writing in foreign language varies from writer to writer (exile, immigrant, former colonies born, personal choice etc) but their works contain many expressions of local elements and the cross-border experience is the source of their creativity. As for Kundera, I noted his ambition to be read worldwide and his intention to reduce local elements in his works. I presented my research results in academic conferences both inside and outside of Japan, organized a workshop and published a book.

研究分野：比較文学

キーワード：越境文学　ミラン・クンデラ　外国語執筆　翻訳　アイデンティティ　世界文学　ローカル　多言語・多文化

１．研究開始当初の背景

（１）動機

本研究課題の申請時における動機として、ミラン・クンデラ（1929-）がチェコ出身の「チェコの作家」として出発し、フランスに移住し、自他ともに「ヨーロッパの小説家」として認められるに至るまでの道のりを国別の文学に囚われない広いコンテクストで考察したいという考えがあった。クンデラは、ただ受動的に他言語に翻訳されるだけでなく、新しい読者を意識し、自国の文化や言語的感覚をいかに変換し、あるいは残すかという点を追究してきた。この試みは他の「越境作家」と呼ばれる作家の創作プロセスや作家としてのアイデンティティ形成を明らかにするための切り口になるのではないかと考え、本研究課題を申請することとした。

（２）背景

本研究課題の申請の背景として、クンデラの「越境」の過程を総合的に捉える研究が少ないことに触れたい。欧米でのクンデラ研究の大半は翻訳を通してクンデラの小説を読み、チェコ語テクストや詩・演劇作品まで遡らないため、小説におけるローカルな要素の取捨選択や変遷が見落とされがちである。一方チェコでは、クンデラが自由化後も帰還せず、チェコ語で書いた詩・演劇作品の出版や上演を制限し、小説をフランス語で書き始め、チェコ語版を発表しなかったことなども与って、クンデラ作品の越境性は話題にならない。亡命や二言語併用と絡めた研究を行うのはチェコ出身の亡命研究者やチェコ国外のスラヴ学研究者だが、1980 年代後半に行われたクンデラによる自己翻訳が中心で、フランス語で執筆した小説は扱っていないという問題点がある。他の越境作家との比較研究も少ない。クンデラの文学の持つ多様な切り口が活かされていないという現状を踏まえ、本研究課題を申請するに至った。

２．研究の目的

本研究は、亡命、移民、難民、旧植民地出身の作家、また個人的な理由で自発的な移住や外国語での執筆を選択した作家など実に多様で、それぞれ個別の背景をもった越境作家の「越境」を、ミラン・クンデラのケースを起点としながら比較検討し、越境作家の複雑な文化的・言語的背景や中間的立場そのものを分析・考察することを目指した。

従来の越境文学研究は作家別、亡命文学、移民文学、移動文学などのケース、作家の出身・移住先の地域など分類ごとの研究が主であり、それゆえに背景が異なると表現内容や形式にどのような違いが生まれるのかといった問題や、越境作家同士の共鳴があまり注目されてこなかった。対して、本研究においてはミラン・クンデラの試みを起点にグローバル化の時代を生きる作家の「世界的に読まれる可能性」と「アイデンティティを支えるローカルな事柄」に対する意識の均衡や拮抗の中で生まれる創造のプロセスを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

クンデラの「越境」から見えてくる問題として、「越境作家におけるローカル性の表現」、「世界の読者に向けた私小説あるいはオートフィクション」、「フィクションでない言説を介した作家のアイデンティティ形成と作品の受容」の三つの課題を扱うこととし、これらをもとにジョゼフ・コンラッド(1857-1924)、ウラジーミル・ナボコフ(1899-1977)、アゴタ・クリストフ(1935-2011)、リービ英雄(1950-)、パトリック・シャモワゾー(1953-)、多和田葉子(1960-)などの作家を比較検討するという方法をとった。年度につき一つの課題を扱い、その成果を定期的に学会での研究発表や学術誌への論文投稿を通してまとめていくこととした。国内での発表の場としては、日本フランス語フランス文学会、日本スラヴ学研究会、日本比較文学会を予定し、国外については三年に一度開催される国際比較文学会（2016 年ウィーン大学）で発表を行うことを目指した。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

研究はほぼ計画通りに順調に進み、申請時の研究目的に適う成果が得られた。様々な背景を持つ越境作家（ジョゼフ・コンラッド、ウラジーミル・ナボコフ、アゴタ・クリストフ、リービ英雄、パトリック・シャモワゾー、多和田葉子など）の越境の試みを、ミラン・クンデラのケースを起点に比較検討することで、彼らの作品において祖国であれ移住先の土地であれ、地域に根差した描写や表現が顕著に見られ、なおかつ越境という自身の経験を創作の源としていることがわかった。越境作家は二つ以上の言語や文化、そして国家の間にいるという中間的立場にありながら、生身の人間として限られた時間の中で特定の地域や文化に触れ、特定の言語を使って創作する。このような創作のプロセスが彼らを「越境作家」たらしめ、彼らの文学を「越境文学」としているのである。

クンデラにおいては他の越境作家に比べ、世界的に読まれることへの意識や「世界文学」という広い枠組みへのこだわりが強く、作品においてもローカルな事象の描写に抑制が見られた。2 件の国際学会での研究報告、1 件の国内学会でのワークショップ、1 件の著作を通して成果を広く公開し、他の研究者との意見交換により本研究課題を発展させるための手掛かりを得ることができた。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

初年度にクンデラがフランスの新しい読者を意識して行った翻訳および原文の改訂

を調査したが、その結果クンデラの『冗談』の初仏訳にまつわる誤訳問題が後のクンデラの自作品の翻訳に対するこだわりや、小説の創作行為そのものに大きな影響を与え、現在の「ヨーロッパの小説家」という小説家像につながっているという流れを明らかにすることができた。この成果は日本フランス語フランス文学会春季大会における口頭発表で発表し、その内容を発展させたフランス語論文が『フランス語フランス文学研究』第 106 号（日本フランス語フランス文学会刊行）に掲載された。クンデラがチェコの国民的作家から、フランスへの亡命作家を経て世界的作家に至るまでの創作プロセスを明らかにした点はクンデラ研究においても越境文学研究においても重要な業績であると考えられる。

2016 年には研究計画で予定していた通り、ウィーン大学にて開催された国際比較文学会第 21 回大会で研究発表を行うことができた。“Le choix linguistique et l'identite des ecrivains frontaliers — autour de la tentative de Milan Kundera —“（越境作家の言語選択とアイデンティティ—ミラン・クンデラの試みを中心に）の題目で行い、作家が外国語、つまり母語ではない言語で執筆するときにそのことが作品で扱う内容や作品のスタイルに与える影響、作家自身のアイデンティティや自己イメージへの意識との関わり方について考察した。多和田葉子やリービ英雄の例から越境文学の新しい局面を示すことができた。また、世代によって異なる越境作家の立場、祖国または移住先の外国の描き方、自己イメージへの関わり方の変化などについて活発な議論が行われた。

また最終年度においては研究実施計画に沿って他の研究者との意見交換および成果発表のためにワークショップを開催した。予算やスケジュールの都合上、当初の計画とは異なり、海外から研究者を招いてのシンポジウムは適わなかったが、日本フランス語フランス文学会秋季大会においてワークショップ「越境作家の外国語執筆とアイデンティティ」を行うことができた。ミラン・クンデラ、サミュエル・ベケット、ウラジーミル・ナボコフ、アンドレ・マキーヌのケースについて 4 人のパネリストがそれぞれ発表を行った。国別の文学の枠組みを越えた多様な創作活動についての研究はもちろん、国別の文学に縛られない研究者同士の交流は刺激的で新しい研究アプローチを提示することができたと考える。質疑応答の時間では世界文学や普遍性の概念、越境文学におけるエキゾチズムやフォークロリックなもの、移民文学の台頭がもたらしうる翻訳文学の排除、越境作家の世代間における文学スタンスの違いなどについて活発な議論が交わされた。

以上の研究成果のうちクンデラに関するものについては著書『ミラン・クンデラにおけるナルシスの悲喜劇』（成文社、2018 年 3 月）の中で公開した。

（３）今後の展望

グローバル化の時代に国家、言語、文化の枠組みを越えて活躍する作家のアイデンティティを考察することが本研究の目的だったが、研究期間を通じて、越境文学におけるローカルなもの、エキゾチックなもの、フォークロリックなものなど、特定の地域に根差した要素の重要性が浮かび上がってきた。故郷や母語、自文化を外から見つめる眼差しをもつ作家が、自らが生きる／生きた土地とどのような関係性を持つのか、フィクションの中で描かれる世界の地域性とはいかなるものか、地方文学と呼ばれる文学が描くそれとどのように違うのかなど今後は越境文学を「地詩学」的な視点から捉える研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 田中柊子、« Franchissement des frontières et localisme chez Milan Kundera »（ミラン・クンデラにおける越境とローカル性）、『フランス語フランス文学研究』（日本フランス語フランス文学会）、査読有、第 106 巻、2015 年、107-123 頁。
https://doi.org/10.20634/ellf.106.0_107

② 田中柊子、「ミラン・クンデラにおけるエクソフォニーの実践」、『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会）、査読有、第 47 巻、2015 年、123-138 頁。
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=36020&item_no=1&page_id=28&block_id=31

③ 田中柊子、「ミラン・クンデラの小説における自伝とフィクション」、『研究報告集』（日本フランス語フランス文学会中部支部）、査読有、第 38 巻、2014 年、53-68 頁。
https://doi.org/10.24522/basllfc.38.0_53

〔学会発表〕（計５件）

① 田中柊子、「ミラン・クンデラの越境と世界的に読まれるための戦略」、ワークショップ「越境作家の外国語執筆とアイデンティティ」での発表、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2017 年。

② Shuko TANAKA, « Le choix linguistique et l'identité des ecrivains frontaliers — autour de la tentative de Milan Kundera —»（越境作家の言語選択とアイデンティティ—ミラン・クンデラの試みを中心に），国際比較文学会(ICLA)第 21 回大会、2016 年。

③ Shuko TANAKA, « Expressions of Czech mentality in the novels of Milan Kundera »(ミラン・クンデラの小説におけるチェコ的精神風土の表現)、国際中欧・東欧研究協議会（ICCEES）第 9 回世界大会、2015 年。

④ 田中柊子、「ミラン・クンデラの小説におけるフランス化」、スラヴ学研究会、2015 年。

⑤ 田中柊子、「ミラン・クンデラにおける越境とローカル性」、日本フランス語フランス文学会春季大会、2014 年。

〔図書〕（計 1 件）
① ローベル柊子、成文社、『ミラン・クンデラにおけるナルシスの悲喜劇』、2018 年、262 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ローベル　柊子（RAUBER，Shuko）
静岡大学・情報学部・准教授
研究者番号：20635502

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）